

サミュエル・ジョンソンの思想：その分析と再構成

——詩について (2)——¹⁾

石 井 善 洋

(受付 2010年10月28日)

「自然の模倣」は、単純に対象をまねるという意味ではなく、対象を区別選択して、自然界や人間の本質的・普遍的な特徴を写すこと、そしてあたかも現実の景物がそこにあるかのような、そこに生きている人間がいるかのような虚構世界を創造するための方法である。そのとき作品は現実の写し絵、現実の代替物として存在し、読者や観客は作中で現実と等価の経験をする。そのような特異な場を提供するのが、「自然の模倣」の芸術的な効果であり、第一の目標である。しかし、ジョンソンはそこに道徳的な効用を期待する。彼は人間性には理性が、理性には正義の観念が具わっていて、それもまたないがしろにできない人間性の本質であると考え。「自然の模倣」が正義の欲するところを忠実に描くということであれば、そこに実現される世界は、作者の道徳的な意思を反映する、もしくは積極的に実現するための虚構世界となる。道徳的なメッセージを真実と呼ぶとき、詩は「悦びと真実を結合する芸術」となるのである。

しかしながら、翻って考えてみると、このジョンソンの姿勢には本質的な問題がひそんでいる。「悦びと真実を結合する」にも、人間のありのままのすがたと人間のあるべきすがたは必ずしも一致しないばかりか、ときには相容れない関係にあるからである。本論では、この視点に立って、はじめに物語の二つの展開方法を確認する。そして、それがジョンソンの所論にある詩的創造性と詩人の役割においてどのように現れているのか検討し、かつ「自然の模倣」の最終的な形を取り上げて、「真理」の位置づけを試みる。

6. 二つの展開

まずジョンソンが随所で力説している二つの論点が、創作上の観点から作品にどのような展開を要求するのか明らかにしておきたい。一つは人間性の描写で、もう一つは道徳的な効用である。人間性の描写の背景には人間のありのままのすがたを、道徳的な効用の背景には

1) 小論は「サミュエル・ジョンソンの思想：その分析と再構成——詩について——」(広島修大論集 第46巻 第1号 通巻第87号 人文編 2005年9月)の後編である。

人間のあるべきすがたを描こうとする姿勢がある。ジョンソンはあるべきすがたのなかに人間の真実を見ようとする。それはたしかにすぐれた文学観ではあるが、しかしすべての文学的事象を包摂しているわけではない。たとえば、フォルスタッフという人間性の真実は、ジョンソンのついに受容しえないものであった。これは人間のありのままのすがたとあるべきすがたが一致しないばかりか、ときには相容れない関係にあることを如実に物語っている。「悦びと真実を結合する芸術」は、ジョンソンの詩論の核心にある文学観だが、そこには二つの背反関係も存在しているのである。私見では、この二つの姿勢は作品にそれぞれ異なる展開を要求する因子なので、まずその特徴を描いてみたい。

ジョンソンが、シェイクスピアの卓越性は人生の表出にあると言い、「ゆえに、人間性が変わらぬかぎり、その名声は安泰である」(Sh: pp.49-50) とつづけたように、人間性の描写は文学的な普遍性にかかわる重要な要素である。また「模倣は苦痛や悦びを生むが、それは本物と間違えるからではなく、本物を心に喚起するからである」(Sh: p.78) というように、読者が主人公の感情を共有し、本物と等価の体験をしうるのも、人間性の描写がもたらす文学的な価値である。

このような文学性を重んずる作品では、性格の確立は物語に一定の流れを生じさせる。性格はそれ自体において思考し、判断し、行動する傾向と勢いを持ち、一種の自律性を獲得する。それは物語の進行に関与して来るはずなのである。換言すれば、性格と、それが体験する出来事の意味の総体が、作品に方向性を与える。性格の確立は思考と行動を規定し、ときには作者のもくろみをも牽制しながら、作品のテーマを生成する直接の要因となる。この種の作品は、テーマを発展させながらそれ自体で成長する一種の有機的な生命体となるのであり、読者や観客はそこに文学性や創造性を見る。ただし、なんらかの力が自律性を制約しない限り、物語はいつまでも終わらない渾沌たるものになる可能性がある。そして、ありのままの人間性は、それが偽らざる人間のすがたであるという点で、表面的な詩的正義とはなじまないことが多い。このような、性格の確立を第一とする展開を、物語の自律的な展開と呼ぶことにする。

他方、道徳的な効用を目的とする物語では、人物には自律性とは別なところから特定の誘導が働くか、性格、思考、行動に一定の変化を加えて、所期の目的を遂げようとする意志が介入する。物語は自律的でもあり得る。が、教訓や真実が重視されるとき、それを示すことが最大の目的となるから、それまでの展開とは変わった、意外性にとむ、教育的・啓蒙的な物語になりやすい。ただし、もし誘導がはなはだしい場合、作中人物は受動的な服従者になる。また、性格、思考、行動が突然変化する場合は、物語の急変を意味するので、テーマの変更につながりかねず、結末においてなんらかの逸脱を犯す可能性が生ずる。その結果、性格の確立や、文学性、創造性は犠牲にされる可能性が高くなる。このような、道徳的な効用

を第一とする展開を、物語の啓示的な展開と呼ぶことにする。

ジョンソンは「悦びと真実を結合する芸術」の価値を強調するが、人間性の描写と道徳的な効用は、厳密には性格を異にし、展開方法も異なるのである。この二つの展開の融合は、原理的に言えば、不可能である。一方はそれ自体で発展する力であるのに対し、他方はそれを方向づける力だからである。もし天衣無縫の状態で二つが融合するとすれば、それは、物語が詩人の識闕下に息づく、いまだ言葉に表しがたい思想と溶け合い、長い時間をかけて発酵してくるときであろうと想像される。しかし、これはもともと本格的な文学の例で、一般的には、不自然に感じさせないようにそれぞれの長所を巧みに組み合わせるものであり、その巧拙が文学的な技巧の一つと見なされる。ジョンソンが描いている詩的創造性もそういう技巧のことであるが、彼の場合、二つの展開の調和が啓示的な展開へ崩れかねない形でもとめられるのである。

7. 詩的創造性

ジョンソンは、詩人の才能について、「才能、すなわち、詩人を詩人たらしめる力、それなくしては判断が的をはずれ、知識が躍動しない特質、また収集し、組み合わせ、拡大し、生命を吹き込むあのエネルギー」(L: Pope. par.310, vol.3, pp.222-223)と、理屈では説明しがたい能力であるにとらえている箇所があるが、創造性については作品の構成面からかなり明確な説明をしている。

彼は作品を正しく評価するためには部分より全体の構成を見ることを勧める。この姿勢は、個ではなく種を描く、個それ自体の価値を認めないという、彼の「自然の模倣」論から予測可能である。道徳的なテーマの追求も、正義の実現も、部分ではなく作品全体で行うものだからである。「全体を見渡すまで部分の吟味をするべきではない。どんな偉大な作品でも全体の意匠と真の大きさを理解するためには、遠くから突き放して知的に眺めてみる必要がある。近くに寄れば小さな微妙なものはみえるだろうが、全体の美には決して気づかない」(Sh: p.111)と作品の偉大さも美も全体の構成にやどっていること、また全体を把握してはじめて部分の位置づけが可能になることを指摘している。

翻訳についても、「偉大な作品の長所は一行ずつくらべるのではなく、全体的な効果と最終的な結果をみて評価されるべきだ」と言い、「翻訳の大家とは、読者の心を捉えてはなさず、一ページずつ熟読玩味してはまた楽しくて再読し、結末はあたかも旅人がすぎゆく日を見送るように惜しみながら読む、そんなふうに訳せる人だけをいう」(L: Dryden. par.312, vol.1, p.454)と、部分の正確さよりも、全体を一編の文学として訳せる大家の技量を称賛している。

全体から部分に目を向けるとき、ジョンソンがもとめるのは変化である。「悦びの大きな

源泉は変化である。一律なものはたとえ秀逸でも最後には飽きてしまう。……人を悦ばせようとする者は、この現在への苛立ちにそなえなければならない。熟練の作家は『激怒させ』たり『なだめ』たり、緩急をほどよく配分する。この巧みな織り合せと必要な変化を欠くために、部分はみな素晴らしくとも全体が単調になる」(L: Butler. par.35, vol.1, p212) とここでも大家の技量と関連づけながら、部分の工夫が全体に貢献するという視点を見せている。しかし部分の混乱は戒められる。たとえば、感情描写に関して、「[Congreeve] は抒情詩という高尚なジャンルに必要な情熱を持ち合わせていなかった。が、熱情にもルールがあること、たんなる混乱には優美も偉大さも存在しないことを教えてくれた」(L: Congreve. par.44, vol.2, p.234) と、どんな激越な場面を描くときでも、一定のルールと節度が必要であると教える。

ジョンソンにとって、文学作品の価値が存するのは、あくまでも作品全体の偉大さや美なのである。部分は全体の効果に貢献するためにあるので、部分が突出するべきではないし、全体の秩序を乱すべきでもない。が、部分も生彩を欠いてはならないのは当然である。熟練の作家は一定の秩序のもとで手を替え品を替えて読者を楽しませようとする。ジョンソンによれば、このような意匠を考案することが創造性 (invention) である。彼は最高度の創造性について、このように論じている。

詩人を詩人たらしめる能力のうち、最大の価値を認めるべきは創造性である。また、創造性のなかでもっとも高度な創造性は、一連の事件をつくりだす能力だと思われる。……まったく新しい物語を考えつき、そこに性格も関心もちがう一団の人物を投げ込み、その多様性が織りなす人間模様から必然の事件を生み出すこと、——これを意外な、しかし自然な事件として描き、読者の良識に衝撃をあたえずして想像力を楽しませ、最後に、そんな結末はあり得ないと思わせる、まったく意外な手段で、満足のゆく結末をつけること、——これは人間精神の至高の業である。(Sk: pp.47-48)

「多様性が織りなす人間模様から必然の事件を生み出す」という言葉から、ジョンソンは性格の描き分けと、それに端を発する合理的なすじの展開を期待していることがわかる。しかも「意外な、しかし自然な」と一見矛盾する展開を期待することで、作家の技量をもとめる。また「読者の良識 (judgement) に衝撃をあたえず」、「満足のいく結末 (a pleasing catastrophe) をつける」という言葉から、たんに錯綜したすじを収めるだけでなく、道徳的にも審美的にも完結した物語となることを期待する。が、「そんな結末はあり得ないと思わせる、まったく意外な手段」(by those very means which seem most likely to oppose and prevent [the pleasing catastrophe]) が示しているように、なんらかの捻りがすべてを収束する展開を

望むのである。ジョンソンは登場人物の性格を全体の構成のなかで発揮させ、いろいろな意外性や変化を盛り込みながら、全体としてひとつの秩序をもち、最後に読者や観客が驚くような効果的な結末をつける作品、そういうものを優れた詩とみなすのである。

これは「悦びと真実を結合する芸術」を構成面からとらえた説明だと理解できるが、自律的展開と啓示的展開の観点から言えば、ジョンソンがもとめているのは、二つの展開の調和を図ることだと言える。さらに言えば、性格の確立から自律的な展開を目指し、「意外な、しかし自然な」とあるように、巧みに人物を誘導して、「満足のゆく結末をつける」詩人の技量である。しかし、注意すべき点は、すべてを収束するための、「そんな結末はあり得ないと思わせる、まったく意外な手段」が、ジョンソンのように道徳的な効用をつよくとめる場合、物語の自律性を超える可能性が高くなることである。彼が「人間精神の至高の業」と言ったとき、本稿で論じている背反関係を明瞭に意識していたわけではないかもしれない。が、背反関係が存在するのは事実であるから、その調和は言外にある絶対条件である。もちろんジョンソンはそれを達成しようとしている。が、現実には、道徳的な効用が、しかも最後にそれを劇的に達成しようとする意志が、啓示的展開の特徴に接近しやすいために、二つの展開の均衡を破りかねないのである。つまり、ジョンソンが考えている最高度の詩的創造性は、二つの展開の完全な調和の上に成り立っているが、道徳的効用を重んずれば重んずるほどそれが危うくなり、前節で確認した背反関係がきわだってくるのである。この関係を念頭におけば、つぎに見る詩人の役割では、ジョンソンは詩的創造性や文学性ではなく、明らかに別のものを目指していることがわかる。

8. 詩人の役割

詩人はどのような心構えで、どのような役割を演じるべきなのか、中編物語『ラセラス』のなかにイムラックが自己の半生を語りながら講ずる場面がある。詩人が描くものは、「一般的な特徴と大まかな概観」、ないしは「実物を彷彿させる際立ったいちじるしい特徴」であると論じたとき、イムラックが最終的に披露した詩人像は、われわれがイメージするものとはだいぶかけ離れていることに驚く。まず、詩人が学ぶべきことについてあげてみる。

詩人にとって、なにものも無用ではあり得ません。どんなに美しいものでも、どんなに恐ろしいものでも、詩人の想像力によく知っていなければなりません。恐ろしいほど巨大なもの、繊細で優雅なものにも通じていなければなりません。庭園の植物、森林の動物、大地の鉱物、天空の流星など、詩人はすべてのもので心に無限の変化をたくわえておかなければなりません。どんな着想でも道徳的、宗教的な真理の実現と装飾に役立つ

からです。もっとも知識が豊富な人が、多様な表現力と、微妙な言い回しや意外な教えで、読者を満足させる力をもつのです。(Rsl. X, pp.42-43)

詩人の想像力はあらゆる知識を前提とする。イムラックがあげている知識は、植物、動物、鉱物、天体等の自然界に関する知識、また諸言語、制度、習慣、心理、感情等の人間に関する知識である。自然や人間について豊富な知識をもち、その現象や心理を解き明かすことも詩人の仕事とされている。そのためイムラックは詩人を「自然の解説者」と呼ぶ。この意味では学者 (scholar) の仕事をかねているので、イムラックは自分を学者とも呼んでいる。

ジョンソンは、他の場所で、詩が扱いうる対象を一般にいう文学を超えるところまでひろげている。たとえば、「ミルトンの迸るような情熱が学問を昇華し、知識の精神を至純のまま作品のなかに放り込んだ」(L: Milton. par.229, vol.1, p.177) と学問が詩の重要な材料になることを示唆している。また、「苦心して科学を詩とし、経度の意味を解き明かし、韻文が科学的な概念を拒まないことを示す方が、ドライデンの学識と才能にはふさわしかった」(L: Dryden. par.258, vol.1, p.434) と科学的な知識や発見ですら詩の対象となり得るとも考えている。ただし、詩の大前提は「一般的な特徴と大まかな外観」、「実物を彷彿させる際立ったいちじるしい特徴」を描くことであるから、科学的な知識といっても、高度に専門的な細分化された知識ではなく、世界と宇宙を説明する大きな真理のことをいう。あくまでも「道徳的、宗教的な真理の実現と装飾に役立つ」知識をさすと理解しなければならない。なぜなら、ジョンソンによれば、人間に最初に必要なものは善悪に関する宗教的、道徳的な知識であり、つぎに人類の歴史と、真理を体現し信仰の正当性を証明する具体的な事例の知識だからである。「分別と正義は時間と空間を超越した美徳である。われわれはつねに道徳家である。幾何学者であるのは偶然にすぎない」(L: Milton. par.39, vol.1, pp.99-100) と断言するように、人間に真に必要なのは、科学的な知識ではなく、まず道徳的・宗教的な知識なのである。ゆえに詩人が主題とすべきものは、あくまでも道徳と宗教に関する問題である。イムラックがラセラスに語る最終的な詩人像は、それを究極的な使命としている。

詩人は自分の時代、自分の国の偏見をすて、善悪を抽象的で不変な状態のもとで考えなければなりません。現行の法律や考え方を無視し、つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理へ上らなければならないのです。ゆえに詩人は、名声が遅々として高まらぬことにも満足し、時代の称賛には目もくれず、自分の主張の是非を後世の判断にゆだねなければならない。詩人は自らを自然の解説者、人類の立法者として著述し、未来の世代の思考と風習を律する存在、時と場所を超越する存在と考えなければなりません。(Rsl. X, pp.44-45)

イムラックが興奮気味に語りつごうとしたとき、ラセラスは「もう沢山だ！ 人間は詩人になれないということが、お前の話でよく分かった」と話をさえぎったが、詩人が、「自然の解説者」(the interpreter of nature) ならばともかく、「人類の立法者」(the legislator of mankind) になるというのは、たしかに、困難であるだけでなく、なにか途轍もなく不遜であるという印象が拭いきれない。が、ここで指摘すべきことは、このときイムラックが説こうとした文学は、歴史も、伝統も、法律も、国民性も超越した善悪と真理を主題とする、人類共通の普遍文学であったということである。詩人は作品のなかで道徳的な問題をあつかう。そのとき、個ではなく種、つまり普遍的・本質的な人間性を描くのであれば、いきおい善悪を抽象的・観念的に思考し、時代も国籍も超えた「つねに変わらぬ一般的、普遍的²⁾な真理」(general and transcendental truths, which will always be the same) を目指す。したがって、詩人は、究極的には、時と場所を超越した「人類の立法者」という立場に行き着く。粗削りにすぎるといふ批判は免れないが、とにかく、ジョンソンの「自然の模倣」論が行き着くところは、このようなところである。

ジョンソンにとって、文学の王道は、人類の道徳的な指針となる作品を物すことであったと言える。詩人は道徳的な自覚をもってつねに最高の作品を世に送り、読者を感化するように努めなければならない。これを怠ることについては、ジョンソンはシェイクスピアにさえつよい不満を感じていた。「この欠点はいかに彼の時代が野蛮だったとはいえ見過ごすことができない。いつの時代でも世のなかをよくするのが作家の使命であるし、正義は時と場所を超越した美德であるからだ」(Sh: p.71) とときびしく批判している。詩人の使命を自覚し、道徳的な感化に努めよというのは、ジョンソンの一貫して変わらぬ主張だったのである。

ここで物語の二つの展開方法を想起してみたい。詩人の役割が、歴史も、伝統も、法律も、国民性も超越した善悪や真理を教えるためのものだとしたら、もし「人類の立法者」による「つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理」を教示するためだとしたら、それは真理に対する受動的な服従者の物語を書くことにならないであろうか。それは作中人物の自律性を超えた、その体験的な意味を逸脱した、はなはだしくは作品の外から押し被せたような結末にならないであろうか。ジョンソンは「必然の事件を生み出すこと」と言ったが、結末も必然的でないといけない。読者の願望である正義の実現もその例外ではないはずである。世代を超えて読者を導くための「抽象的で不変な状態のもとで考える」善悪 (consider right and wrong in their abstracted and invariable state) や「つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理」は、額面通りにうけとれば、受動的な服従者をつくるか、物語の自律性を超えて、作品の流れを変えてしまうように思われて仕方がないのである。

2) 原文は 'transcendental' であるが、ジョンソンはこれを 'General; pervading many particulars' の意味で用いているという Yale 版の註による。

一般に、人物に起こりうる変化は、その性格、思考、行動、テーマの範囲内では可能だが、それを超えることは好ましくない。フィクションはこの点で実人生を写しきれないときがある。現実の世界では不測の事態が起こり得るのに対して、虚構の世界では、どんなに異常なストーリーでも、物語は一定の流れをもって進行するからである。読者や観客を驚かす予期せぬ出来事があるとしても、それは作品の内部からくる合理的な展開の範囲を超えてはならない。ジョンソンが『リア王』に衝撃を受けたのは、悦ばしいはずのテーマの完結が、きわめて現実的な、残忍な出来事で阻まれてしまったからである。作品が秘めている合理的な期待が裏切られたからである。『リア王』はジョンソンが考えるフィクションを超えるものを持っている。彼にとって物語は設定されたテーマの内側に留まっていなければ、その完結を見るのでなければ、「満足のゆく結末」はないはずなのである。しかし、「善悪を抽象的で不変の状態のもとで考える」物語や、「つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理へ上る」物語は、作品の内部から生成されるテーマを完結させるのではなく、善悪や真理を演繹的・啓示的に教示する、文学的な創造性とは異質な物語をつくる可能性がある。

この問題は、論理的には、可能性の指摘にとどまるが、これがもっぱら観念的な「真理」を重んずる、啓示的な展開に立っていると云わざるをえない理由は、それがジョンソンの思い描く詩人像であったことが他の評論から見て否定できないからである。ジョンソンの批評にはそのような方向性と勢いがたしかに存在している。彼が散文物語を論じて、「美德の完璧なすがたを描いてなぜわるいのか」と言い、「人間が到達しうるもっとも純粋な美德」を描くようにもとめたのはそれがよく現れていた箇所なのである。しかし、それは、「悦び」と「真実」がみごとに調和したと言うよりは、なにか釈然としない、奇妙な閉塞感を感じさせる例ではあったが。詩的創造性では、困難はあるにしても、とにかくジョンソンは完全な調和を目指していた。が、イムラックが述べた詩論は、啓示的な展開に偏りすぎていて、普遍的な道德の教示のためならばともかく、文学的な創造性のためには、現実に機能するかどうか疑問だと言わざるをえないのである。イムラックの口を借りていたジョンソンは、このとき文学とは異なるものを見ていたはずである。

9. 信 仰 詩

ジョンソンの詩論にはもうひとつ見落としてはならないテーマがある。それは信仰詩の解釈であるが、私見ではここに「自然の模倣」の最終的なかたちが現れている。それを見届けることによって、「真実」全体にゆるやかな見通しがつき、「つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理」の意義を角度を変えて考察することが可能になると思われる。

ジョンソンによれば、信仰の核心である「神と人間の霊との交わり」は詩の主題とはなり

えない。なぜならば「創造主の慈悲をこいねがい、救い主の功徳を嘆願することが許された人は、すでに詩では描きえない高みにある」(L: Waller. par.136, vol.1, p.291) からだ。したがって、ジョンソンが示唆するように、信仰は「自然の模倣」で議論されていた「自然」の範疇にはないと言うことができる。しかし、議論の全体を整理してみれば、「真実」の内容が入れ替わるだけで、ここでも「自然の模倣」がたしかに機能していることがわかる。ジョンソンの議論をいくつかあげてみる。

詩の本質は創造である。予期せぬことを生み出し、驚かし、喜ばせるような創造である。が、敬虔について語れることはごくわずかである。またごくわずかだからこそ普く知られている。しかしわずかではあるが何もつけ加えることはできない。新しい感じ方から洗練を得ることはなく、新奇な表現からなにかを得るということもない。(L: Waller, par.137, vol.1, pp.291-292)

読者は、当然のことながら、詩に理解のひろがりや空想の高揚を期待する。よき詩からはつねにそれが得られるものだからだ。しかしキリスト教徒がこれを祈禱詩に望むことはできない。偉大なもの、望ましいもの、恐ろしいものは、すべて至高の存在者の名前にふくまれている。全能に上昇はなく、無限に拡張はない。完全に向上はあり得ない。(L: Waller, par.139, vol.1, p.292)

ジョンソンは、敬虔な瞑想の目的は、信仰、感謝、悔悟、嘆願のためであると言い、それが「自然の模倣」という詩の機能と相容れない性質をもっていると示唆する。信仰の形式はつねに一樣で、空想によって装飾を施すことはできない。たとえば、感謝は、神聖なすべての感情の吐露のうちもっとも慶びにみちたものであるが、感情をもたない存在に語りかけるのであるから、その様式はわずかなものに限られ、表現するというよりは、ただ心で想うべきものとなる。悔悟は裁き手の面前でおののくことであり、言葉の抑揚や形容句をまついとまはない。また人間から人間への嘆願は、いろいろと説得の手立てがあり、冗漫にもなるかもしれないが、神への嘆願はただ慈悲をもとめて泣き叫ぶのみである。つまり信仰は装飾や虚構になじまないから「模倣」の対象ではない。信仰詩は、信仰の周辺にあるテーマで満足すべきなのである。ジョンソンはこのようにつづけている。

純粹に宗教的な感情では、もっとも素朴な表現がもっとも荘厳であることがわかる。詩はその輝きと力を失う。なぜなら詩は何かそれ自体よりすばらしいものとして装飾に使われるものだからだ。信仰詩は記憶を助け、耳を喜ばせることしかできない。その目的

にはきわめて有効かもしれないが、心には何も与えない。キリスト教神学の思想は、雄弁には素朴すぎ、虚構には神聖すぎ、装飾には荘厳すぎる。比喩や修辞でそれを勧めることは、凹面鏡で星座を拡大しようとすることに等しい。(L: Waller. par.141, vol.1, pp.292-293)

「自然の模倣」にはふつの「自然」があった。ひとつは自然界における「自然」、もうひとつは人間性における「自然」。また人間性のなかには、性格としての人間性と、人間の本質的機能としての理性、またそれにもとづく正義という意味があった。正義の実現は信仰の小世界ともいうべき、読者の願望を実現する虚構世界を創造する議論であった。いずれの「自然」もありのままのものではなく、選択され、再構築された、現実とは異なる、それゆえいっそう真実な「自然」であった。「自然の模倣」は虚構をかりて「真実」を見ることに本質があったのである。しかるに信仰は虚構であってはならない。それは真情の吐露、叫び、嘆き、慶びそのものである。そのような感情をもっとも荘厳に、もっとも真実に表現しうるのは、「至高な存在者の名前」それ自体である。それ以外は余剰であり、不純であると見なされる。ジョンソンは「宗教的な目的をすでに十分に達しているものに何かを付加するのは、無益であるばかりか、冒瀆だとも言える」(L: Cowley. par.147, vol.1, pp.49-50)、「真実が十分に精神をみたところでは、虚構は無用であるばかりか、始末に負えないものでもある。偽物は本物を墮落させる」(L: Thomson. par.38, vol.3, p.437-438)とも言っている。

上述の議論からは、たしかに、信仰は「自然の模倣」の範疇にはないと言えそうである。しかし、ジョンソンの思想に照らして言えば、信仰も「模倣」の対象でなければならない。なぜなら、信仰それ自体、人間の「真実」であると考えなければならないからである。彼の著作からしても躊躇なくそう断定できる。ジョンソンの著作のすべては、理性によって「未来の状態」を慮ること、すなわち信仰への導入を意図していると言って間違いない。理性によって導かれる正義が人間の「真実」であったのと同じように、理性によって導かれる信仰もまた人間の「真実」なのである。その限りにおいて、信仰は「模倣」の対象でなければならない。しかし、ジョンソンは、宗教的な観点から、現実とは異なる、創造された「美」や「真実」を拒絶するのである。

ただし、彼の所論から明らかなように、ジョンソンは個々の信仰の形式や、個々の信仰の言葉を認めているのではない。興味深いことに、表現という観点から言えば、実は、この段階で「自然の模倣」と同じ論理が働いていることがわかる。「自然の模倣」は個ではなく種を描く。個別ではなく本質をとる。信仰においては、個人の言葉を排して純粹な言葉をとる。すべてを排して神の名前をとる。言葉と意味は不可分であるから、言葉を選ぶことは記述の対象を選ぶことと同義である。信仰においては、言葉を選ぶことで対象を限定し、不純な思

想と感情を排除する。純粋な信仰詩に素朴な表現が尊ばれるゆえんはそこにある。宗教的な感情がすべて至高の存在者の名前にふくまれているのであれば、信仰詩は、つまるところ、神の名前といくつかの聖句からなる、きわめてオーソドックスな宗教詩とならざるをえない。この場合、「自然の模倣」は、「真実」を創造するのではなく、真実を選択し、近づくという意味である。「自然」の意味が限定されていたとき、シェイクスピアを「風俗と人生をうつす忠実な鏡を読者の前にかかげる詩人である」(Sh: p.62)と言ったときと同じように、このときの「模倣」は真実を正しく写すという意味なのである。「自然の模倣」は「本質をとる」という意味につきる。この機能は、文学としての役割ではなく、宗教的な真実を目指すつよい論理として、ここでも生きているのである。

10. 「真理」の位置づけ

ここまでは創作論として「自然の模倣」を概観してきた。そのなかでジョンソンが扱っていた「真実」を整理すれば、人間性としての「真実」(文学の本質の解明)、道徳観念としての「真実」(正義の実現)、人類に教示すべき普遍的「真理」、そして宗教的な「真実」(神の御名への回帰)と、その内容は文学的な主題から宗教的な主題へ及び、一つのゆるやかな方向性をもっていたことに気づく。

虚構との関係で見ると、「真実」には性質の異なるものがある。人間性としての「真実」と道徳観念としての「真実」は、その実現の場として、当然のことながら、虚構を必要とした。「真実」は虚構の生成になるもので、虚構と「真実」は一体の関係にある。ジョンソンはここで完全な調和を目指していたのである。宗教的な「真実」は、すでに真実の感情が精神を満たしており、それを表す言葉は神の名前だけなのであるから、虚構を必要としない。このように、虚構を必要とする「真実」としない「真実」、虚構と一体の「真実」と分離している「真実」がある。

では、「つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理」はどうであろうか。どのようなテーマも展開も、虚構の存在理由は、その内部から生成することにある。さもなければ文学的な創造性からは乖離したものとなる。また啓示的展開の性質がつよく表れれば表れるほど、虚構は自律的生成力がよくなり、合目的な性格をつよめる。前述したように、啓示的展開に偏っていると言わざるをえないイムラックの詩論では、虚構と「真理」の関係はきわめて合目的である。それは水と油の関係に譬えて説明することができる。虚構と「真理」は、攪拌すれば一つのものに見えるかもしれない。しかし、どんなに攪拌しても、この「真理」は分離・断絶を厭わない「真理」である。虚構は、はじめは一つに見えるが、やがて完全に分離する「真理」を明らかにするための手段である。「真理」はそれのみの光を纏って一人歩きしてい

く。それが「つねに変わらぬ一般的、普遍的な真理」である。

この一連の議論の示すところは、イムラックが説いた詩人の役割は、虚構の上に築かれる「真実」から、虚構によらない「真実」を明らかにする、中間地点における役割ではなかったかということである。自ら「自然の解説者、人類の立法者」として著述し、時代の称賛には目もくれず、自分を「時と場所を超越する存在」と見なす詩人は、たしかに人間のなかにあって人間を超えるものを目指している。ジョンソンは文学における地上的な「真実」ではなく、それを超越する普遍的な「真理」を、文学において見出すことを使命としていたかのようである。それが宗教的な真実への飛躍のためであることは想像に難くない。しかし、文学を超えるものは、文学にはなりえないことも、「自然の模倣」は教えていたのである。

「自然の模倣」が、客観的に言って、文学から宗教へ発展していく方法であると言うことはできない。ここで跡付けたのは、ジョンソンがそれをいかに用いたか、「自然」や「真実」をどのように見たかという、いわば彼の思想の痕跡である。彼の著作には道徳から宗教へ向かおうとする勢いがある。人間的な性情を見据え、それを道徳的、宗教的に善とするにはどうすべきか、それがつねに彼の議論の中心にあった。「自然の模倣」は、本来、純粋な文学的方法であったかもしれないが、ジョンソンにとっては、それも道徳的、宗教的な手段の一つだったのである。

引用作品

L: *The Lives of The English Poets* (The Clarendon Press, Oxford, 3 vols, 1905)

Sh: *Johnson On Shakespeare* (The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson, vol.VII, 1968)

Rsl: *Rasselas and Other Tales* (The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson, vol. XVI, 1990)

Summary

An Analytical Reconstruction of Samuel Johnson's Thought

— On Poetry (2) —

Yoshihiro Ishii

The analysis of Johnson's consideration of poetry tells us that 'the imitation of nature' is a literary means to express truth with the help of fiction and that truth is always talked of both as the reality of life and a realization of moral sense. For him, 'Poetry is the art of uniting pleasure with truth, by calling imagination to the help of reason.' (*L*: 1.170)

In uniting them, however, lies a latent difficulty, for technically a depiction of life can be at variance with a depiction of what it should be. The lifelike characters will act true to their natures, the plot then beginning to command its own logic, and the reader or audience experiencing the reality of the progressing event, while to realize moral sense the characters will be guided to a particular destination with a more or less inevitable damage to the reality of life and the autonomy of the plot.

In 'the invention of the highest degree' (VII. p47), the poet is evidently expected to unite the two goals in a dramatic fashion. But the variance can become conspicuous when the poet brings 'those very means which seem most likely to oppose and prevent [a pleasing catastrophe] (VII. p48)' at the end of the work to achieve his moral purpose, because the flow of experienced reality and the conclusion expected from it can be impaired by a twisted, moral denouement.

Having the difficulty in mind, we find that the poetry that Imlac shows appears still harder to get the goals united. 'Right and wrong' considered 'in the abstracted and invariable state' (XVI. p44), and 'general and transcendental truths' to 'preside over the thoughts and manners of future generations' (XVI. p45), can certainly hinder the reality of life, the autonomy of the plot, and/or give an undue conclusion to the work, because the conclusion is to be brought from a consistent subject that the work is dealing with. The 'truths,' if deductive as can be inferred from the context, can certainly leave a gap between the subject and the 'truths' themselves. Imlac's idea of poetry should be taken as an extreme form of 'the imitation of nature,' which is too given to abstract moral truth at the cost of a depiction of life.

On faith poetry, Johnson suggests that it is not covered by ‘the imitation of nature,’ for when religious feelings are best expressed in the name of God, poetry has no place in faith. However, his overall accounts of the subject do show that the main use of ‘the imitation of nature’ is playing an important part in faith poetry too. The very preference for the name of God over any personal expressions or imaginations is precisely what it requires, since its key use is to take quintessence. Evidently it is functioning here as a means to lead the reader to the religious truth.

In the review of all of Johnson’s discussions concerning ‘the imitation of nature,’ we can find a few kinds of truth. From a viewpoint of literary criticism, the ‘general and transcendental truths’ that Imlac reveals are problematic, but in the survey of the whole of the truths that Johnson deals with, the ‘truths’ are obviously at an important middle stage: between truths that can only be expressed with the help of fiction and the truth that ever exists and must be taken without the help of fiction.